

## 北条時政の上洛

野口 実

はじめに

単行本として刊行された唯一の北条時政の伝記のタイトルが『裏方將軍 北条時政』（小野眞一氏著、叢文社、二〇〇〇年）であることに端的に示されるように、北条時政に対する一般のイメージはけっして芳しいものではない。その理由について、戦後、東国武士研究を牽引した安田元久氏は、その著書『北条義時』（吉川弘文館 人物叢書、一九六二年）の中で、つぎのように述べている。

彼は江戸時代の史家の間でも、概して不人気であつた。この時代はいわゆる「武士道」、すなわち武家道徳が完成された時期であるが、それはこの時代の封建的幕藩体制の維持・強化に奉仕するものとして体系化された道徳規範に他ならない。従つて、そこでは主君に対する忠誠が最も重視された。その道徳に律して歴史を見ると、主家である源氏將軍家を三代にして滅し、將軍の実権を奪ってしまった北条氏、とくに義時は、その陰險な策

謀とあいまって、強く非難されなければならなかった。

これは時政の子義時に対する見解であるが、こうした評価は時政にも敷衍できるであろう。「裏方將軍」と呼ばれる所以である。

文治元年（一一八五）、没落退京した源義経の後を承け、頼朝の代官として北条時政が上洛したことはよく知られており、通説では鎌倉幕府における初代京都守護と位置づけられている。<sup>(1)</sup>

しかるに、頼朝挙兵以前の北条時政に対する一般的な理解は、伊豆の小土豪にすぎないというものであり、<sup>(2)</sup>それゆえ頼朝の代官という重責を委ねられた理由は、頼朝の舅であるという一点に帰結することとなる。<sup>(3)</sup>たしかにそれゆえ要件の一つではあるが、頼朝に叛した義経の搜索・追捕、京都のみならず畿内・近国一帯における治安維持、朝廷・寺社や権門貴族への対応、それに混乱に乗じて私権拡張を目論む在地勢力への対応など、難題山積みの状況の下、ただそれだけの理由で時政が選任されたとは、とうてい思えない。本稿では、この文治元年における時政の上洛をとおして、幕府成立以前における彼および伊豆北条氏の政治・社会的な存在形態について再検討を試みたいと思う。

## 注

(1) 上横手雅敬「京都守護」〔国史大辞典〕第四巻、吉川弘文館、一九八三年。

(2) 戦後の在地領主制論が支配的な研究環境の中で、伊豆時代の北条氏が「小土豪」にすぎないと主唱した奥富敬之氏以来（『鎌倉北条氏の基礎的研究』吉川弘文館、一九八〇年・『鎌倉北条一族』新人物往来社、一九八三年）、基本的にこの認識は継承されておられ、近年、鎌倉北条氏研究をリードしている細川重男氏による評価も「当時の東国武家社会にあつてはその他大勢、有

象無象の武士団の一つに過ぎなかった」〔北条氏と鎌倉幕府〕講談社、二〇一一年）というものである。

一九六〇年代において東国武士研究を牽引された安田元久氏は、北条氏の進取的・打算的性格を指摘するとともに、京都に深い関係をもっていたであろうとの見解が有力であることを指摘し、その理由として、北条氏の「本拠地は、西方に対する伊豆国の門戸を扼し、また東海道筋に近く、中央の情報を得るには、かなり便宜があつたと思われるし、また在庁官人として国衙機構を通じて、中央と密接な関係をもつたことも容易に想像されるであろう。従つて京都政界の動向は、かなり正確に北条時政に知らされていたもの思う」と述べておられる〔北条義時〕。要するに本拠の立地が京都と結ばれた交通の要衝に位置し、在庁官人であるから京都との関係も密接だといふのである。しかし、これらは下野の小山氏、下総の千葉氏なども同じ条件下にあることで、伊豆が少しばかり京都に近いというだけではない。今日の研究では、武士は経済的・職能的基盤を得るために交通・流通の拠点に本拠を構え、政治的な基盤を確保するために常に京都権門との関係を取り結ぶ存在だつたことが明らかになっており、それを踏まえれば安田氏の指摘は結果論と言わざるを得ないのである。北条氏の進取性や打算性を説明するには、小山氏や千葉氏と異なる、あるいは同じ要素でもそれをはるかに上回る点を見出す必要がある。

(3) 坂井孝一氏は「頼朝は」時政を「後見」として「宿老」と対置させてバランスをとり、表立つて行えない政治的な駆け引きに利用したのだと思われる」〔曾我物語の史実と虚構〕吉川弘文館、二〇〇〇年、一九二頁）、上杉和彦氏は「必ずしも御家人の最上位クラスには入っていない。頼朝後見役という立場にある北条氏が、幕府内での支配的地位を確立するために、他の有力御家人との間で長く激しい政治闘争を演じなければならなかった」〔源頼朝と鎌倉幕府〕新日本出版社、二〇〇三年、二六六頁）、永井晋氏は「鎌倉幕府の組織造りが進むなかで、時政の占める位置はなかった。頼朝との冷たい関係がわかる」〔鎌倉幕府の転換点『吾妻鏡』をよみなおす〕NHKブックス、二〇〇〇年、五五頁）と述べたのは、いずれも、時政の政治的基盤が頼朝の舅であることにしか求められないという認識に基づくものであろう。

## 一 吉田経房と時政

上洛した時政が王朝権力の主体である院との交渉に際して、その窓口の役割を期待したのは、院近臣の一人で実務能力にもすぐれた正三位権中納言吉田(藤原)経房であつた。<sup>①</sup>ちなみに、時政と経房が若年の頃から知己の間柄であつたことは、近年、森幸夫氏が明らかにしたところである。その根拠とされた史料は、経房から五代目の子孫にあたる甘露寺隆長の著した『吉口伝』で、その内容を解釈・要約すると、

伊豆国の在庁官人であつた北条時政(当時十七〜二十一歳)が目代から咎をうけて召籠められてしまったとき、伊豆守だつた経房(十三〜十七歳)の対応に感じ入るところがあり、後に婿となつた頼朝にそれを語つたことが、頼朝が経房を「賢人ユユシキ人」として「憑申」すきつかけになつた。

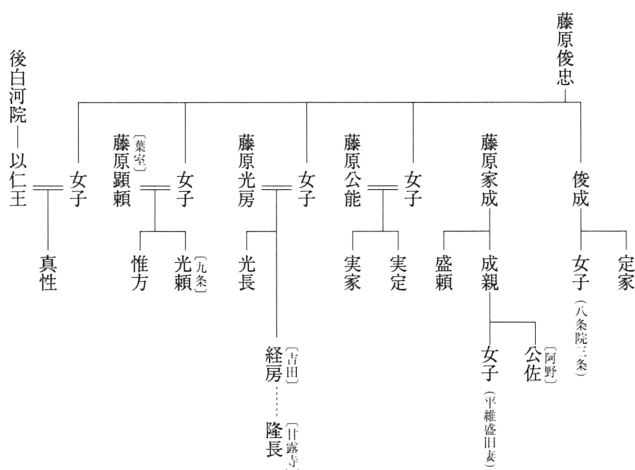
というのである。<sup>②</sup>

頼朝が経房を交渉の窓口として「憑申」した背景は、もともと後白河院近臣たる源義朝の嫡子として少年期を京都で過ごした頼朝自身の経歴からもうかがうことが出来る。すなわち、頼朝は母方に院近臣を輩出した熱田大宮司家をもつただけではなく、自身も統子内親王(鳥羽皇女・後白河准母)の皇后宮権少進となり(『兵範記』保元三年二月三日条)、統子が院号を宣下されて上西門院となると、その藏人に任じたが(『山槐記』平治元年二月十九日条)、その際、皇后宮権大進あるいは院判官代として常に頼朝の上司の立場にあつたのが、当時十六〜十七歳の経房その人だつたのである。

元木泰雄氏は、北条時政が頼朝の代官として上洛した原因について、「頼朝の岳父という点よりも、むしろ経房などとの政治的関係が重視されたと見るべきかもしれない」と述べておられるが、さすがの慧眼であり、まさしく王朝政府側の要人で最も信頼のおける人物と私的関係を有することが、時政が頼朝の使者（代官）に選ばれた最大の理由であつたのだろう。奇しくも経房は、頼朝と時政双方に若年の時代から親しく接する機会をもち、おそらく相互に深い信頼関係を醸成していたのである。青少年期の純粹な心に結ばれた固い絆が、難問山積の公武交渉を円滑化したといえよう。

なお、時政の在京中、院は頼朝に恭順の意向を示す使者として強いて経房を鎌倉に派遣しようとしたが、頼朝が公卿に長途を凌がせるのは畏れ多いとして固辞したために沙汰やみになったことがある（『玉葉』文治元年十二月十七日条・『吾妻鏡』同月二十三日条）。頼朝の側（具体的には時政）としては、経房の京都不在は何としても避けなければならなかったのであろう。また、このことから、院の側としても、頼朝との交渉の仲介者として経房に頼むところの大きかったことがうかがわれる。

〔系図1〕 吉田経房・徳大寺実定の係累



(1) 高橋秀樹「解題」(同編『新訂 吉記 索引・解題編』和泉書院、二〇〇八年)、美川圭「関東申次と院伝奏の成立と展開」(『院政の研究』臨川書店、一九九六年、初出一九八四年)。

(2) 森幸夫「伊豆守吉田経房と在庁官人北条時政」(『季刊ぐんしよ』再刊第八号、一九九〇年)。

ちなみに、『吉口伝』の「頼朝卿憑申故大納言由来事」には、本文で要約した部分に続けて、吉田定房(隆長の兄)の家司である源重泰が関東に下向した際、大方禅尼(北条高時の母覚海円成尼・大室泰宗女)から、「経房と時政の旧交は周知されていることである。頼朝が出世すると諸人はこれに媚びることがあったが、経房一人はそうせず、また、平家方に与したわけでもなかった、賢人として殊に憑みにされたとのことだ」という話を聞いたことが記されている。この部分の紹介も含めて、『吉口伝』に経房と時政・頼朝の所縁について触れられていることは、早く村田正志氏の指摘するところであったが、村田氏は経房と時政との関係が頼朝挙兵以前に遡るという理解は示していなかったのである(村田正志「吉田定房事蹟」『村田正志著作集 第三巻 続々南北朝史論』思文閣出版、一九八三年、初出(松本周二との共著)は一九四〇年)。なお、村田氏の研究については坂口太郎氏の教示を得た。記して謝意を表したい。

(3) 元木泰雄『源義経』(吉川弘文館、二〇〇七年)一八〇頁。

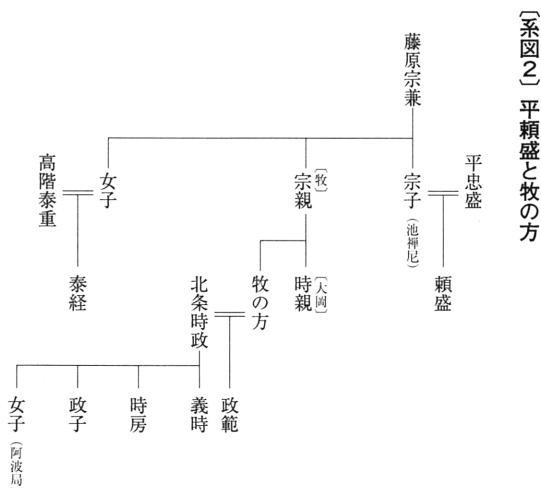
## 二 平頼盛と時政

時政が頼朝の代官として上洛したもう一つの理由としてあげられるのは、彼と平頼盛との関係である。時政の後妻牧の方が頼盛の母(忠盛の正室)池禅尼(藤原宗子)の姪で、彼女の父(宗子の兄弟)にあたる宗親が頼盛領の駿河国

寿永二年（一一八三）七月、平家都落ちに加わらなかつた頼  
 盛は、その年の十月、京都を逃れて、関東に向かつた（『玉葉』百  
 鍊抄）同二十日条。

十一月六日、右大臣九条兼実のもとに、その腹心である源雅頼からもたらされた情報によると、頼盛はすでに鎌倉に到着し、侍二人と子息全員を伴って、五十人ばかりの郎従をしてがえた頼朝に対面し、その後、鎌倉から一日ほどの行程のところにある相模国府に赴いて、目代を自らの後見とした。また、この時、同じく都から下った一条能保は、頼朝の邸から一町ほど離れたところにある全成の家に宿していたという

（『玉葉』十一月六日条）。



頼盛の後見になった相模国目代が何者であるかについては、森幸夫氏が、『玉葉』元暦元年（一一八四）四月一日条に「頼盛卿後見侍清業」、同七日条に「頼盛卿後見史大夫清業」とあることなどから、すでに五味文彦氏によって院政期に旺盛な活躍を見せた史大夫の一人として紹介された、「頼盛・頼朝・後白河院の三者の連絡役を果たした」下級官人の中原清業と同一人物であることを明らかにしている。清業は頼盛が大宰大貳となった際（在任は仁安元年（一一六六）～同三年）に、その目代として八条院領肥後国人吉庄の前身である球磨白間野庄の立荘に関わったと推定され、頼朝挙兵時には相模守藤原範能の目代をつとめており、寿永二年八月に範能が但馬守に遷任し、後任の守が不在という状況の中で、そのまま相模国府にとどまっていたというのである<sup>(6)</sup>。

治承四年の頼朝の挙兵に際し、上総や下総では目代が頼朝側の勢力の前に立ちはだかった<sup>(7)</sup>。そもそも、頼朝による反平家の挙兵は、伊豆目代山木兼隆の討滅に端を発するものであった。しかし、頼朝が本拠と定めた鎌倉の所在する相模の目代は頼朝に敵対することはなかった。しかも、平家本流と袂を分かって東下して来た頼盛の後見になったというのである。頼朝の挙兵に際して、相模国では大庭景親が国内の武士たちを動員して追討軍を編成したが、国衙在庁系の三浦・中村氏の一族はこれに敵対する行動をとっている。頼朝の挙兵に、頼盛との連絡のもとで、この中原清業が関与したことまで想像しなくなるが、少なくとも相模国内の状況は清業から頼盛に報告されていたはずである。

平家都落ち後の頼盛の行動は、こうした前提を踏まえて捉えられるべきもので、彼は坂東に下って、頼朝の政權樹立に積極的に協力する姿勢を示したのである。北条時政は頼盛の外戚である牧（大岡）氏の縁者として当然そこに介在したと思われる。

『玉葉』元暦元年（一一八四）四月一日条には「或人云、頼盛卿後見侍清業、去月廿八日上洛、以件男余事又奏法皇



云々」と見える。中原清業は頼盛の使者として上洛し、「余事」を後白河院に奏したというのだが、「余」とは『玉葉』の記主である右大臣九条兼実にはかならず、これは角田文衛氏が指摘するように、摂政基通（兼実の甥）を罷免して兼実をこれに任ずべしという頼朝の意向を奏上したのであろう。<sup>(9)</sup>

『百鍊抄』元暦元年五月三日条には頼盛が院の許可を得て東下したという記事があるので、これ以前にいったん帰洛したようにもとれるが、それは不自然であるばかりか、『公卿補任』元暦元年平頼盛条に「五月日自関東入洛」とあるなど、ほかの史料の記事とも整合しない。佐伯真一氏の指摘するように、寿永二年十月に京都を逐電した頼盛は、翌月に鎌倉に入ってそのまま年を越し、元暦元年五月に京都に戻ったというのが事実なのであろう。<sup>(10)</sup>『吾妻鏡』は頼盛の鎌倉出発を六月五日とするが、頼朝はそれに先だって頼盛のために盛大な送別の宴を催し、引出物として金作劍一腰、砂金一袋、鞍馬十疋を贈っている（六月一日条）。頼盛は公武交渉の主役として歴史の檜舞台に躍り出る機会をつかんだかに見えるのである。

しかし、京都に戻った頼盛を待ち受けていたのは平家都落ちに従わなかった伊勢・伊賀の「小松殿の侍」たち（重盛家人の武士団連合）の引き起こした反乱であった。<sup>(11)</sup>一方、西海に逃れた平家主流は、翌文治元年（一一八五）三月、壇ノ浦に滅亡を遂げた。こうした中で頼盛は心身に不調をきたすようになったらしく、<sup>(12)</sup>元暦元年十二月に権大納言を辞し、文治元年五月には東大寺で出家して八条室町第に籠居。翌二年正月、この邸に後鳥羽天皇が方違え行幸を行おうとしたときも、これを固辞しており、すでに健康を損ないすっかり世俗への関心も失っていたようで、六月二日にいたり五十五歳で薨することとなる。頼朝は、同十八日に水尾谷藤七を弔問の使節として上洛させている（『吾妻鏡』同日条）。

- (1) 杉橋隆夫「牧の方の出身と政治的位置」(上横手雅敬監修『古代・中世の政治と文化』思文閣出版、一九九四年)。
- (2) 拙稿「『京武者』の東国進出とその本拠地について―大井・品川氏と北条氏を中心に―」(京都女子大学宗教・文化研究所『研究紀要』第一九号、二〇〇六年)。
- (3) 細川重男『鎌倉北条氏の神話と歴史―権威と権力―』(日本史料研究会、二〇〇七年)。
- (4) 石橋山合戦後に敗走中、伊豆国府を経た後、分散していた加藤光員・景廉兄弟が大岡牧で「各相逢、悲涙更湿襟」(『吾妻鏡』治承四年八月二十八日条) したことから見ても、大岡牧は頼朝方の武士にとって安全な空間であったことが知られる。
- (5) 平家都落ち後の平頼盛の動向については、田中大喜「平頼盛小考」(同『中世武士団構造の研究』校倉書房、二〇一二年、初出は二〇〇三年) を参照。
- (6) 森幸夫「頼朝挙兵時の相模国目代について」(日本史料研究会会報『無為 無為』第九号、二〇〇九年)。なお、清葉は『玉葉』元暦二年正月二十三日条にも「頼盛卿郎従」と見える。
- (7) 拙稿「源頼朝の房総半島経略過程について」(拙著『中世東国武士団の研究』高科書店、一九九四年、初出一九八五年)。
- (8) 拙稿「院・平氏両政権下における相模国」(拙著『坂東武士団の成立と発展』弘生書林、一九八二年、初出は一九七九年)。
- (9) 角田文衛『平家後抄』朝日新聞社、一九七八年。
- (10) 佐伯真一「寿永年間頼盛関東下向について」(水原一編『延慶本平家物語考証』新典社、一九九二年)。なお、この論文については坂口太郎氏の教示を得た。記して謝意を表したい。
- (11) 『延慶本平家物語』第五末は、この乱を頼盛に敵対する謀叛として描いており、川合康氏は平家一門の非主流派内の対立・矛盾としてとらえ直すべき事件であると評している(川合康「治承・寿永内乱と伊勢・伊賀平氏―平氏軍制の特徴と鎌倉幕府権力の

(12) 角田文衛『平家後抄』朝日新聞社、一九七八年。

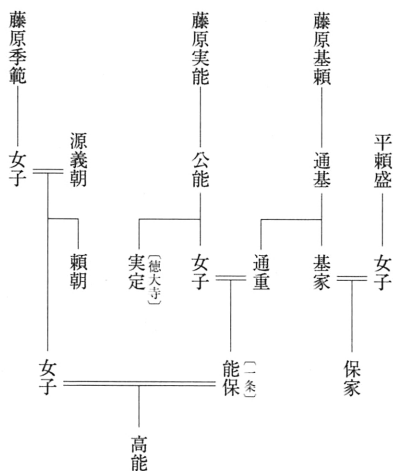
三  
一  
條能保と時政

鎌倉滞在中の能保は頼朝邸での花見、鶴岡への社参、船遊

びや小笠懸の見物などたいへんなもてなしを受け、元暦元年（二二八四）五月、おそらく頼盛とともに帰洛したようである。

壇ノ浦の合戦で平家一門の本流が滅亡した後の文治元年

(二一八五)五月七日、能保は彼の家人である後藤基清らの警護のもと、妻子をとめない、壇ノ浦合戦で捕虜とした平宗盛を護送する義経と同じ日に出京し、翌二年まで八ヶ月あまり鎌倉に滞在している。この間、能保は頼朝の近親として、源氏の菩提寺となる勝長寿院の造営・供養について頼朝の相談



〔系図3〕 平頼盛と一条能保・徳大寺実定

相手をとめるとともに、京都で不穏な動きを見せる義経や朝廷の情勢などを在京の家人を通じて頼朝に報告し、政務の面でもその補佐役をつとめた（『吾妻鏡』 文治元年五月十七日条以下）。

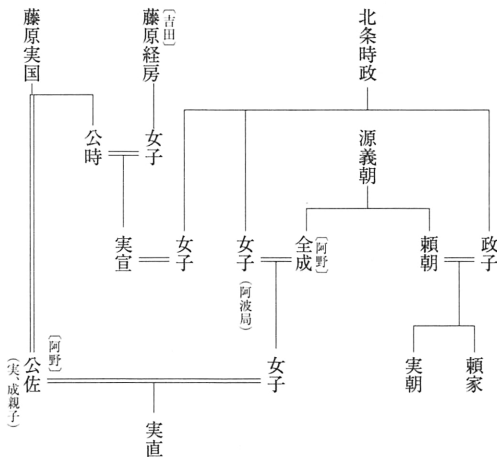
後白河院が義経の要求によって頼朝に対する追討宣旨を下すべきかを諮問した際に、諸卿がそれぞれのような意見を述べたかといった重要な情報を把握したり、院近臣の高階泰経から頼朝への執りなしを求める使者を派遣されるなど、鎌倉における能保は公武交渉の場で大きな存在感を示した。

この間の文治元年十一月末から翌年三月までは、北条時政が在京した時期に重なり、頼朝は時政と能保の二つのルートから京都の情報を入手し、能保らの意見を徴しつつ在京の時政に指示を与える態勢をとっていたことになろう。

ところで、『吾妻鏡』同年十二月七日条は、頼朝が対京都交渉の「巨細」については能保とともに侍従公佐らと示合わせて治定したと述べ、この公佐について「二品御外舅北条殿外孫法橋全成息 女子也也」と、その素性を説明している。

『尊卑分脉』（第一篇一二三頁）によると、公佐は鹿ヶ谷事件で有名な院近臣藤原成親の実子で閑院流の藤原実国の養子である。<sup>(3)</sup>『吾妻鏡』の所見に従えば、彼は文治元年六月以前から鎌倉にあり、一条能保とともに対京都政策において頼朝の相談に乗る立場にあったことになる。しかし、公佐がこの段

〔系図4〕北条氏・源氏・阿野氏



階で既に「北条殿」(時政)の外孫を妻にしていたというのは信じがたい。頼朝の弟である全成と時政女子(政子の妹、阿波局)の婚姻は、全成が兄の挙兵に応じて東国に下ってから後になされたものとみるのが常識的な理解だからである。『吾妻鏡』編纂時の過誤(いわゆる「切り貼りの誤謬」)によるものであろうか。<sup>(4)</sup> ちなみに、この公佐の兄弟公時の子にあたる実宣は時政の女子を妻にしている。<sup>(5)</sup>

公武交渉の過程で能保が頼朝に対してもっとも貢献したのは、文治元年十一月、義経・行家が挙兵し義経に頼朝追討の宣旨が下された際に、院の諮問にあずかった公卿たちの対応に関する詳細な情報を入手したことであろう。これによっていわゆる廟堂改革が実現されたからである。この点について佐伯智広氏は、この情報の発信源が能保の母方の縁者である内大臣徳大寺実定であること、そして、能保と徳大寺家の密接な関係を明らかにしている。<sup>(6)</sup> ここで注目されるのは、徳大寺実定が吉田経房同様に、平治の乱以前、統子内親王の皇后宮職、院号宣下後の上西門院庁において頼朝の上司の地位にあったといふこと<sup>(7)</sup>で、頼朝は実定の人となりを知尽くしていたのであろう。

文治二年(一一八六)二月、能保は妻と娘を伴って鎌倉を後にする。京都に戻った彼は、関東に下った北条時政に代わって京都守護の任に就く。時政の帰東と能保の上洛の理由は、廟堂が肅清され、いわゆる守護地頭設置の勅許によって義経・行家の追討と諸国の治安維持の態勢が整って公武関係が新たな局面を迎えたことに求められよう。また、頼朝は、長く鎌倉に滞在した能保に対し、家族ぐるみの交流を通じて、自らの分身と見なしうるだけの信頼感を抱くことが出来たのであろう。

## 注

(1) 以下、一条能保の動向については、塩原浩「頼宗公孫―一条家の消長―中世前期における一公卿家の繁栄と衰退」(中野栄夫編『日

本中世の政治と社会』吉川弘文館、二〇〇三年）を参照。本稿では、この論文に示されている事実に関する典拠史料については注記を省略する。

なお、一条能保に関する先行研究としては、江平望「一条能保の前半生―その身分と官途について―」（同『島津忠久とその周辺 中世史料散策』高城書房出版、一九九六年）がある。

(2) 親族関係を見ると、頼盛の女が能保の叔父にあたる基家の妻となり、保家を産んでいる（『尊卑分脉』第一篇二六四頁）。

(3) 公佐を産んだ八条院坊門局（俊成女）の妹八条院三条は、藤原成親の弟盛頼の妻であった。服部英雄氏は、盛頼が元暦元（一一八四）年八月、頼朝から肥前国晴氣保地頭職を与えられたのは、源義朝・頼朝親子への思いを成親と共有する盛頼が流刑中の頼朝に与えた援助に酬いるものであったと説く（服部英雄「鹿ヶ谷事件と源頼朝」『歴史を読み解く―さまざまな史料と視角―』青史出版、二〇〇三年）。公佐が頼朝のもとにあった背景を考える上で興味深い指摘である。

(4) 一方、史料的な価値は乏しいものの、『義経記』は奥州に下る途中の義経が駿河国の阿野にあった全成の館に立ち寄ったことを語っている（『阿野禪師に御対面の事』、『吾妻鏡』文治元年十二月七日条の記事を裏付ける形になっている）。

(5) 『明月記』元久元年四月十三日条の、時政の子政範の任官記事に「実宣中将妻兄弟。近代英雄也」とある。実宣は安貞二年（一一三八）、五十二歳で死去している（『尊卑分脉』第一篇二七頁）。なお、彼の母（公時の妻）は吉田経房の女であった（同第二篇六六頁）。

(6) 佐伯智広「一条能保と鎌倉初期公武関係」（『古代文化』第五八巻第二号、二〇〇六年）。

(7) 徳大寺実定については、宮地崇邦「徳大寺実定について―平家登場人物の謎―」（『國學院雑誌』第八〇巻第一号、一九七九年）参照。

#### 四 時政の武力

ところで、上洛した時政がその困難な任務をこなすためには、公家・寺社との交渉や諸勢力間に惹起された紛争を調停し得る政治力のみならず、在京中の東国武士を統率するだけの権威と武的力が要求されたはずである。

搜索・追捕の対象である義経は頼朝の「御曹司」であり、<sup>(1)</sup>その出自を背景に、また平泉藤原氏のネットワークを通じて貴族社会に広く人脈を有していた。<sup>(2)</sup>彼はただの軍事的天才ではなく、院権力を支える、かつての平家のごとき軍事権門に成長を遂げる可能性をはらんだ存在として頼朝から危険視されたのである。<sup>(3)</sup>

本稿の冒頭でも述べたように、変革の主体として下からの動きを重視する領主制論的武士認識に基づく頼朝拳兵以前の北条氏に対する評価は、「伊豆の小土豪」の枠組みに押さえようとする前提で論じられることが多い。たとえば、治承四年八月、伊豆の目代山木兼隆を急襲した際、北条氏の動員した軍勢が数十騎程度にしか過ぎなかったことや、その所領が狭小であることをもって、千葉・三浦などの東国における有力武士団に比較して、北条氏が圧倒的に微弱な存在であることが強調されるのである。<sup>(4)</sup>しかし、山木攻めは奇襲作戦であって、公然と軍勢動員を行い得ないという具体的な条件が無視されているし、そもそも中世前期の武士は生産・流通に規定された都市的な存在であるから、面的な所領の広さをもってその実力を評価することは出来ないのである。伊豆国北条の地が、国衙近傍の水陸交通の要衝であることは周知のところであらう。

もうひとつ、北条氏の武力基盤の脆弱性が指摘されるとき、その材料とされるのが『吾妻鏡』文治二年三月二十七日条に収められた、時政が京都守護などの職務を「腹心」の「眼代」時定に委ねて東下するに際し、残留して洛中警衛を担うために選定された「勇士」たちの交名である。これを以下に掲げよう（北条本による。「」は比定さ

れる人名<sup>(三)</sup>。

平六兼仗時定〔北条時定〕

の太の平二〔野田平二〕

くはゝらの二郎〔桑原二郎〕

さかを四郎〔坂尾四郎〕

ないとう四郎〔内藤盛高〕

ひたちはう〔常陸房昌明〕

ちうはち〔中八〕

うへはらの九郎〔上原九郎〕

いはなの太郎〔岩名太郎〕

同平三

のいよの五郎太郎〔野与五郎太郎〕

同五郎

とのおかの八郎〔殿岡八郎〕

いや四郎

同六郎

大方十郎

あつさの新大夫〔梓新大夫〕

やしはらの十郎〔菅原十郎〕

ひせんの江次〔肥前江次〕

同八郎

弥源次

へいこ二郎

ちうた〔中太〕

たしりの太郎〔田尻太郎〕

同二郎

やわたの六郎〔八幡六郎〕

同三郎

しむらの平三〔志村平三〕

ひろさハの次郎〔広沢次郎〕

同五郎

かうない〔江内〕

平一の三郎



いかの平太〔伊賀平太〕

同四郎

同五郎

この交名について、鎌倉北条氏研究の先達である奥富敬之氏は、「ひたちはう（常陸房）ら独立した御家人でありながら、源平合戦の間に北条氏の郎等化した<sup>(6)</sup>借り武者<sup>(7)</sup>とも呼びうるものも含まれるとして、その理由を「あまりにも時政の兵力が少なすぎたため」に求めている。しかし、時政は頼朝の代官なのであって、上洛時に率いた一千余騎も当然私的な武力ではなかったのであり、奥富氏の見解はこの交名の性格を正當に評価したものとはいえないであろう。

交名筆頭の平六儼仗時定は、旧稿で指摘したように、おそらく時政の弟で、北条一族の在京活動を担う存在であったと思われる。<sup>(7)</sup>「儼仗」の名乗りはその成果にはかならず、この官職に在任中か旧任の経歴を示すものである。儼仗は陸奥守や大宰帥・大貳が自ら申任することのできる護衛官である。<sup>(8)</sup>建久元年（一一九〇）、時定が「陸奥所」の仮名をもって河内国領の押領を行ったことを後白河院から指弾されているから〔吾妻鏡〕同年八月三日条 陸奥守の儼仗に補されていたのかも知れないが、後述のような北条氏と平頼盛との関係を踏まえると、永万二年（一一六六）に頼盛が大宰大貳となり、慣例を破って現地に赴任したとき（時定三歳）の申任である可能性の方が高いのかも知れない。次に注目されるのは、この交名に見える苗字を名乗る者が後の北条氏被官の中に多く見られるという事実である。<sup>(10)</sup>このことは、時政が離京に際して、眼代の時定に、それまで時政の配下にあつた御家人の中から、北条氏に由縁が深く、畿内の事情に通じた武士を付属させたことを物語り、そのうちの多くの者の子孫が、その後も北条氏に従うに至つたことを示すものと思われる。

私は旧稿において、佐々木紀一氏の所説を踏まえて、時政の祖父が伊勢平氏庶流の出身である時家であることを述べ、時政・時定の畿内支配が、そうした有利性によって実現されたものであることを推測したが<sup>(1)</sup>、交名末尾の「伊賀」を名乗る三名は、伊賀国を本拠とする伊勢平氏庶流の者たちではないだろうか（伊賀には頼盛の家人も多かったと考えられる）。

なお、交名の十三番目に見える「ちうはち」は、伊豆配流中から頼朝に仕えていたことの知られる「中八惟平」であろう。石橋山合戦の際に以仁王の令旨をつけた旗を掲げていた中四郎惟重はその兄と思われるが、『葛山家譜』<sup>(2)</sup>に、北条時定の妻が、この惟重（維重）の姉であったという記事が見える。

#### 注

(1) 上横手雅敬「いまなぜ義経なのか」（同編『源義経 流浪の勇者―京都・鎌倉・平泉―』文英堂、二〇〇四年）。

(2) 前川佳代「源平合戦後の義経」（上横手雅敬編『源義経 流浪の勇者―京都・鎌倉・平泉―』、拙稿「義経を支えた人たち」（同）。

(3) 元木泰雄「源義経」（吉川弘文館、二〇〇七年）、同「延慶本『平家物語』にみる源義経」（佐伯真一編『中世の軍記物語と歴史叙述 中世の文学と隣接諸学4』竹林舎、二〇一二年）。

(4) 「はじめに」注(2) 所掲論文。ほかに、八幡義信「鎌倉幕政における北条時政の史的評価」（『歴史教育』第一一巻第六号、一九六三年）など。

(5) 比定に際しては御家人制研究会編『吾妻鏡人名索引』（吉川弘文館、一九七一年）、安田元久編『吾妻鏡人名総覧』（吉川弘文館、一九九八年）を参照した。

(6) 奥富敬之『鎌倉北条一族』二五頁。

- (7) 拙稿「伊豆北条氏の周辺―時政を評価するための覚書―」(京都女子大学宗教・文化研究所『研究紀要』第二〇号、二〇〇七年)。  
(8) 井上薫「僭仗」(『国史大辞典』第五卷、春名宏昭「僭仗小考」(同『律令国家官制の研究』吉川弘文館、一九九七年)。  
(9) 時定の仮名「陸奥所」については、鈴木国弘「鎌倉幕府「守護」設置の目的―「奥郡」と「陸奥所」の検討を通して―」(『史叢』第七六号、二〇〇七年)に詳しい論及がある。

ちなみに、時定の帯した僭仗の官は、それ自身にも護身兵士の支給される一種の員外史生であり(春名宏昭「僭仗小考」)、とすると、時定が用いた「陸奥所」の仮名は、彼が形式的にはあれ、陸奥国衙の「所」を管掌する地位にあったことを示す、という見方も可能なのかも知れない。

- (10) 北条氏研究会編『北条氏系譜人名辞典』(新人物往来社、二〇〇一年)所収「北条氏被官一覧」。

なお、この交名に見える北条時定と常陸房昌明は、最勝寺領越前国大蔵庄の地頭である時政の代官をつとめていたことが知られる(上横手雅敬「吾妻鏡文治三年九月十三日条をめぐる諸問題」同『鎌倉時代政治史研究』吉川弘文館、一九九一年、初出は一九七三年)。

- (11) 拙稿「京武者」の東国進出とその本拠地について―大井・品川氏と北条氏を中心に―(京都女子大学宗教・文化研究所『研究紀要』第一九号、二〇〇六年)。なお、佐々木紀一氏の所説は「北条時家略伝」(『米沢史学』第一五号、一九九九年)による。  
(12) 『裾野市史』第二巻 資料編 古代・中世(一九九五年)の別冊付録「中世系図集」に収録。

## おわりに

以上、文治元年(一一八五)十一月、義経退京の後、北条時政が頼朝の代官として上洛した理由について、彼の申

中央政界における人脈と頼朝の係累・人脈の重複を明らかにし、また、翌年三月、時政が離京するに際して京都に留め置いた武士たちがどのような存在であったのかを検討した。

時政は、若年の頃から信頼関係を結んでいた吉田経房や、伊豆北条近隣の領主大岡氏の姻戚にあたる平頼盛（おそらく既に大岡氏から後妻として迎えていた牧の方の従兄弟）、そして、有力権門徳大寺家と一体の關係にあつた一条能保という、いずれも頼朝ともゆかりの深い貴族たちと連絡をとりながら、都において権門寺社勢力との交渉に臨み、廟堂肅清やいわゆる守護・地頭問題、さらには京都警衛、畿内近国の軍政などの難題に立ち向かつて大きな成果をあげたのである。時に独断専行も見られたものの、在京中の施策はすこぶる公平無私であつたために、時政は公家側の人々からも好感されたようで、後白河院は時政の離京を惜しむこと頻りであつたという（『吾妻鏡』文治二年三月二十三日・同二十四日条）。

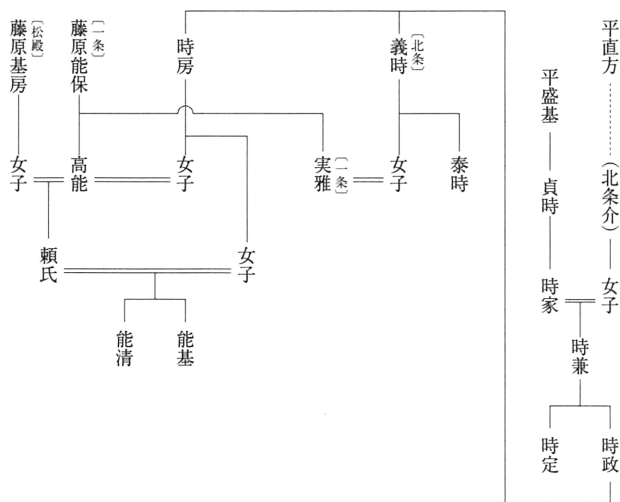
元木泰雄氏は、時政が外孫頼家を頼朝の後継とする上で障害となる義経排斥の急先鋒であつたことを論じ、その彼が頼朝の代官として上洛を果たしたことで、義経以下源氏一門と同等の立場を確立したことを指摘したが、鎌倉政権内部において時政が政治権力を大きく伸張し、東国の御家人社会において一頭地を抜く存在となりえた背景としては、さらに、京都・中央政界に広く人的なネットワークを張りめぐらせて、貴族社会に一定の身分的なステータスを確保していたことを付け加えることができるのである。そのことは、時政の嫡子政範（政憲）が、元服後間もない元久元年（二二〇四）四月十二日の除目で一挙に従五位下左馬權助に叙任されこと、そして、これを記録した藤原定家が政範について「近代英雄」と注記している事実（『明月記』同十三日条）や、のちに政範の庶兄にあたる時房が將軍実朝に三位昇進を希望して内擧を得たというエピソード（『吾妻鏡』建保二年四月二十七日条）が雄弁に物語っているように、村井章介氏は、北条氏が血統的制約から、その実力に見合う制度的地位たる將軍となることが出来なかつ

たことを説くが、しかし、その一方で、北条氏が京下りの文  
官吏僚たちと協調しながら、將軍家家政機構において最上位  
の位置を占めることが出来た事情についても顧慮すべきであ  
ろう。

もう半世紀以上も前、永原慶二氏はその著『源頼朝』（岩波新書、一九五八年）の中で、「時政のような武士たちは、関東でこそ独立心を誇ったが、伝統的な王朝の權威の前に出て、その圧力によって自信を失わされたとき、政治的見識の低さのゆえに、他愛なくこれに屈してしまふ」（一四九頁）と述べている。このような理解に連動して、北条時政の身分的位置が論じられる際にしばしば材料とされるのが、時政に会った右大臣九条兼実が、その日記『玉葉』の中で時政を「北条丸」（文治元年十一月二十八日条）と呼び、「近日珍物」（同二年三月二十四日条）と評したことである。しかし、武士で兼実に「丸」をつけて呼ばれたのは時政に限らないし、文治元年十一月十八

日条では、頼朝の専一の者で、この時鶴岡八幡宮の別当に任じられていた玄雲を「若宮別当丸」と呼んでいる。たとえ創設当初とはいえ、鶴岡八幡宮（鶴岡八幡新宮若宮）の別当に補された人物が無教養でまったくの田舎者であるはずがない（なお、『吾妻鏡』によれば、この時期の鶴岡社別当は、頼朝の従兄弟で園城寺から招かれた法眼円暎である。「玄雲」は円暎の

〔系図5〕 北条氏・一条氏・松殿家



暁と同一人物であろうか。「丸」をつけての呼称は、あくまでも最上級の貴族である兼実の視点から発せられていることに注意しなければならないだろう。一方、時政に対する「珍物」の評も、すでに河合正治氏が述べているように「近ごろ珍しい硬骨漢」というほどの意味と捉えるべきものであろう。すべて、北条氏Ⅱ伊豆の小土豪という先入観が史料解釈を曇らせているのである。

六波羅の地と北条氏の関係についても、北条氏の出自が『源平闘諍録』の記す通りであるならば、伊豆の「北条介」に婿入りした伊勢平氏系の時家（時政の祖父）の祖父にあたる盛基が康和二年（二一〇〇）に「珍皇寺西小路西地武段」を「宛て賜は」った事実が高橋昌明氏によつて紹介されている。時政は義経から没官した京地の中から「綾小路北河原東」を配分されているが、在京中の彼が六波羅に宿所を構えた背景には、こうした歴史的な経緯があったかも知れないのである。

さらに、佐々木紀一氏の紹介した北酒出本『源氏系図』に興福寺の悪僧として有名な信実の母が北条時家女と見えることから、北条氏と奈良仏師との繋がり<sup>(13)</sup>の機縁も想定されてくる。決定的な史料は見つからないが、頼朝卒兵以前の北条氏と京都・畿内近国との深いつながりを推測させる材料は少なからぬものがあるといえよう。

注

(1) 大山喬平「文治の国地頭をめぐる源頼朝と北条時政の相剋」(『京都大学文学部研究紀要』第二号、一九八二年) 参照。

(2) 安田元久「北条時政」(同『鎌倉幕府 その実力者たち』人物往来社、一九六五年)。

(3) 元木泰雄『源義経』。

(4) その際に大きく貢献したのが時政の妻牧の方であろう。すでに杉橋隆夫氏が明らかにしているように、彼女は京都の貴族社会に

大きな人脈をもっていた（杉橋隆夫「牧の方の出身と政治的位置」）。ちなみに、時政が越前国の地頭職の眼代に登用し、のちに頼朝からも召出された越後介高成は彼女の外甥であった（『吾妻鏡』文治二年六月十七日、建久二年十一月十二日、同十二月一日条）。時政の在京中、その政治顧問の立場にあり、のちに時政の推挙によって頼朝に仕え、陸奥留守職に補任された右近将監家景（もと九条大納言光頼の侍。なお、大山喬平「文治の国地頭をめぐる源頼朝と北条時政の相剋」を参照）や初代の大平が平家一門の出身者で占められた鶴岡八幡宮寺二十五坊の供僧のうちの多くが時政の推挙によるものである（貫達人『鶴岡八幡宮寺―鎌倉の廃寺―有隣新書、一九九六年）という事実の背後には、牧の方の姿が垣間見えるように思えるのである。実際、時政の業績のうちのかなりの部分は彼女の力に負うところがあつたのではないだろうか。後考を期したい。

(5) 佐藤雄基氏は、実朝に三位昇進を願ったのは時房ではなく、時房同様に武蔵守の官歴を有する大江親広で、この話が建保二年四月二十七日条に置かれたのは、『吾妻鏡』編纂時における「切り貼りミス」によるという見解を示している（佐藤雄基「公卿昇進を所望した武蔵守について―鎌倉前期幕府政治史における北条時房・足利義氏・大江親広―」阿部猛編『中世政治史の研究』日本史史料研究会二〇一〇年）。しかし、この佐藤氏の考証に難点のあることは金沢正大氏の指摘するところであり（金沢正大「『吾妻鏡』人名表記の史料的価値―歴史雑感（10）―」ウェブサイト『歴史と中国』）、そもそも北条氏の身分に対する旧来の認識を前提にした立論であつて承伏できない。本論で指摘するように、時房の弟にあたる政範が藤原定家から「英雄」（撰閲家に次ぐ高い家格を示す）と評されていることも顧慮されなければならないだろう。

佐藤氏は、大江親広が公卿昇進を望みうる前提として源通親の猶子であつたことをあげるが、想像を逞しくすれば、北条時房も時連から時房に改名した背景として、たとえば松殿基「房」のような有力貴族との猶子関係の設定が想定されるのではなからうか。松殿家と北条氏およびその縁者との関係については、基房の子師家が時政女を妾としたこと（『尊卑分脉』第四篇三二頁）が知られるほか、基房の女が一条高能の妻となつて頼氏を生み、高能の妻には北条時房女がいるが、頼氏は時房の別の女と婚して（承

久の乱以前)、その間に能基(妻は北条義時女)・能清(妻は時房の孫女)が生まれたという事実が明らかにされている(塩原浩「頼宗公孫一条家の消長―中世前期における一公卿家の繁栄と衰退―」。時房の最終的な位階は正四位下であり、鎌倉時代を通じて、御家人でこの位階まで到達できたのは六名しかいないことや、長期にわたる在京活動と旺盛な文化活動を考えるならば(渡邊晴美「北条時房について」『政治経済史学』第五〇〇号、二〇〇八年)、時房の公卿昇進の可能性を容易に否定することはできないと思われる。なお、時房が時定亡き後、北条氏の在京活動を「分業」する立場にあったことについては、拙稿「承久の乱における三浦義村」(『明月記研究』第一〇号、二〇〇五年)において詳述したところである。

(6) 村井章介『中世の国家と在地社会』(校倉書房、二〇〇五年)。

(7) 拙稿「玉葉」(九条兼実)―東国武士への視線(松蘭斎・元木泰雄編『日記で読む日本中世史』ミネルヴァ書房、二〇一一年)。また、文治元年十一月十八・十九日条には「松出納丸」と呼ばれる人物も所見する。

(8) 河合正治『執権北条時政』(安田元久編『鎌倉幕府將軍執権列伝』秋田書店、一九七四年)。なお、「近日珍物」の記事の記された『玉葉』文治二年三月二十四日条には、時政が兼実を拜謁する際に取り次ぎ役をつとめた兼実の家司源季長に対して、時政が籍(名簿)を進めたことが記されており、時政の抜け目のない態度が看取される。

(9) 佐々木紀一「北条時家略伝」(『米沢史学』第一五号、一九九九年)および拙稿「『京武者』の東国進出とその本拠地について―大井・品川氏と北条氏を中心に―」を参照されたい。

(10) 高橋昌明「平正盛と六波羅堂」(同『増補改訂 清盛以前』文理閣、二〇〇四年、初出は一九七九年)。

(11) 木内正広「鎌倉幕府と都市京都」(『日本史研究』第一七五号、一九七七年)。

(12) 鎌倉幕府勢力と六波羅の関係については、高橋慎一郎「武家地」六波羅の成立(同『中世の都市と武士』吉川弘文館、一九九六年、初出は一九九一年)を参照。



(13) 佐々木紀「上座信実後伝」(山形県立女子短期大学附属生活文化研究所報告「第三五号、二〇〇八年」)。

(14) 瀬谷貴之「東国武士と運慶」(別冊太陽 日本のごころ 一七六 運慶 時空を 超えるかたち)平凡社、二〇一〇年、同「運慶―中世密教と鎌倉幕府―」(神奈川県立金沢文庫特別展『運慶 中世密教と鎌倉幕府』図録、二〇一一年) 参照。

〈付記〉本稿は、京都女子大学宗教・文化研究所における平成二二年度共同研究「中世前期における都鄙の文化・社会情況(法然・親鸞登場の歴史的背景に関する研究Ⅱ)」(研究代表者)野口実【研究協力者】岩田慎平・畠山誠・前川佳代・藪本勝治)の研究  
成果の一部である。

なお、本共同研究の成果としては、ほかに岩田慎平「舞女微妙とその周辺」(京都女子大学宗教・文化研究所ゼミナール機関誌『紫苑』第九号、二〇一一年)、野口実「平清盛と東国武士―富士・鹿島社参詣計画を中心に」(杉橋隆夫教授退職記念論集(「立命館文学」第六二四号、二〇一二年)掲載予定)がある。

#### 〈キーワード〉

東国武士 鎌倉幕府 京都守護